

[071] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10196>

出版情報：語文研究. 71, 1991-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《會員著書紹介》

中野三敏他編

日本書誌学大系50

『近世活字版目録』

本目録は所謂古活字版を除く近世の活字による出版物約一四〇〇点を網羅したものである。近世活字版に関しては、従来各図書館・個人蔵のものについては刊行されていたが、現在所在がわかつているものを網羅したものは本書がはじめてであり、現時点での全貌を明らかにしているものといえよう。

記述の体裁は、一行目に書名・書型・巻冊数、二・三行目以下に著編者名・匡郭・界線の有無・行字数・題簽・見返し・版心・序跋者（及び年記）・刊記・刊語・注記事項を記している。また、巻末に「近世活字版研究文献目録」・「索引」を付して、利用に便ならしめている。更に、本書の特徴として、写真版の存在するものについてはその旨を注記していることがあげられる。それらの写真を参照することによって、より具体的に近世活字版というものを捉えることができる。

しかし、近世活字版をどの範囲で扱うかということについて、あるいは幕末以降のものについてはまだ課題も多いようである。また、共編者の多治比郁夫氏の言われるごとく、「近世後期の整版による出版書に比べればその数は微々たるもので、出版史の上からは傍流に過ぎない」ものではあるが、これだけのまとまった点数がある

ることが判明した今、近世活字版の包括的な研究がまたれよう。

（平成二年十月 青裳堂書店 A5判 三八六頁 一六〇〇〇円）

瀬良益夫著『古代文学と吉備』

著者は昭和十三年、九州帝国大学法文学部を卒業後、金光学園高等学校、岡山就美女子短期大学・同女子大学において、古代文学の研究と後進の指導にあたってこられた。書名からも窺えるように、本書は、郷土吉備を知悉した著書ならではの、地域に密着した論考が集められている。まず第一部は、古代における吉備国の状況を、伝承をもとに史学・考古学を援用しつつ解明する。

倭建命伝承と吉備氏族

上代の吉備と播磨

和氣清麻呂の氏姓と和氣氏の祖先伝承

上代におけるかきこきもの——感動の根源について——

南備中の村祭——岡山県浅口郡金光町——

続く第二部は、京都帝国大学大学院在籍中に、澤瀉久孝博士に師事

した著者の、『万葉集』に関する論考を収める。

『万葉集』における牛窓の潮騒の歌

美作の二子山と『万葉集』の古歌

—— 卷十一の能登香山の歌について ——

大伴旅人と吉備の酒

万葉歌人大伴三郎——その人と歌風について——

隠りくの泊瀬の国——大和の古い国とその文学——

『万葉集』における有情とその存在の表現

——「ある」を「をり」を中心として——

第三部は、平安時代の文学についての論考の集成。「地方」に焦点をあて、政治社会的視点から当時の文学を考察する。

平安時代文学と受領階層の人々——吉備の国司をめぐって——

民政政治家在原行平とその和歌

美作守大江匡房——吉備国司伝——

平安朝の大嘗会和歌に現れた高梁川流域の地名風物

平家の武将・歌人 平行盛と備前児島

光源氏と赤鼻の女

なお、本書は昭和六十三年に亡くなられた著者の遺稿集である。心

からご冥福をお祈り申し上げます。

(平成二年十月 瀬良益夫先生論文集刊行会 A5判 三一四頁

非売品)

学海日録研究会編纂

『学海日録』

『日本近代文学大事典』第三巻、「依田学海」の項末尾は次の如く記される。

なお無窮会に所蔵されている四四冊の日記は明治文壇史の側面を伝える貴重な資料である。

安政三年より明治三四年まで、実に四五年間にわたって書き継がれた膨大な分量の日記。その存在が知られ、その計り知れない資料的価値について度々説かれながら、しかし、衆人の見得る形にはこ

れまでなされることのなかった日記。今回、開始された『学海日録』(全一一巻・別巻二)の刊行は、文字通り、待ちに待たれたものである。

一一巻に分冊される『日録』のうち、第七、八巻が既に刊行されており、第七巻は、明治一九年一月二五日から二二年一月四日まで、第八巻は、二二年一月一日から二五年四月六日までの日録をそれぞれ収める。

さて、学海先生の日録を追うて見るに、さすがに、芝居に関する記事の多さが目に付く。その感想は細かく、役者の伎芸から「衣服その他のさま」にまで及ぶ。

また、学海先生を訪ねる者は多く、先生も又人を訪ねる。先生は人と種々のことを語り、様々なことを人より聞く。

そのような中で、先生は詩を賦す。著述を為す。天候に頭を悩まし、子供の病に胸を痛める。妾宅へ通う。学海先生は多忙である。

『学海日録』は「明治文壇史の側面を伝える貴重な資料である」。それは間違いない。何しろ「日録」中には錚々たる文人が登場する。ただ、それより以前に『日録』は江戸・明治を生きた一人物の全部を見せてくれる書物である。まずは、あらゆる先人観を捨てて、『日録』をすなおに読むこと。そうして、学海という人物そのものの魅力を味わい、また、『日録』の記された時代の空気を胸一杯吸い込むこと。本書の真価はそこから自ずと現れ来るものと思われる。

(第七巻・平成二年一月 四一八頁 四七〇〇円

第八巻・平成三年 一月 三八九頁 四五〇〇円

岩波書店 四六判)

瀬里廣明著

『幸田露伴—詩と哲学』

本書は、一九六二年から一九七九年にかけて各種の雑誌に発表された論考六篇と、書き下ろし「露伴と氣の思想」を収める。内容は以下の通り。

露伴と氣の思想

露伴と杜甫・李白

露伴の『渋沢栄一伝』とその思想

『五重塔』と一無位の真人

露伴文学における華嚴思想について

露伴文学と西田哲学

露伴と共産主義

著者は、露伴の思想の根幹をなすものは、儒・道・仏が一体化されたもので、露伴はその根源にある神秘体験を得ていた人である、と言われる。また、あとがきにおいて、「書名を『幸田露伴—詩と哲学』としたのは、ハイデッガー晩年の詩人的思索に触発されることがあったからである。そして露伴の文学にそのようなものを私は見たのである。」と言われる通り、先の三教の本質に通じ、それを極めて自由に詩的に描ききった露伴文学に対し、哲学的見地から説明を施したのが本書である。

その中では、露伴の該博さ、その思想の深遠さを証明するかのよ

うに、孔子、ヘラクレイトス、ニーチェ、ハイデッガー、トルスト

イ、鈴木大拙、西田幾多郎らが、洋の東西を問わず、時の古今を問わず、自由に往き來する。何れにしても、近代作家の中でも研究が遅れているとされる幸田露伴について、このように多角的視点から考察がなされることは喜ばしいことであり、本書の刊行によって、今後の露伴研究の、ますますの発展が期待される。

(平成二年十二月 創言社 A5判 三七〇頁 三五〇〇円)

春秋会著

私家集全釈叢書

『源兼澄集全釈』

本書は、本学会井源衛名誉教授のかつての受講者を中心とした古典輪読会、春秋会が、『我が身にたどる姫君』の注釈刊行後、昭和五十七年五月から六十年末にかけて『源兼澄集』を輪読した成果をまとめたものである。

松平文庫本一三七首を底本とする一方、「底本に無き歌」、「家集に無き歌」、「作者存疑の歌」五十一首を補遺として掲げ、『兼澄集』諸本の歌、及び他の兼澄詠歌を網羅している。輪読においては、はじめ書陵部蔵谷森本によって解釈し、次に松平本に抛り改めて解釈しなおすという二段階を経ているため、私家集特有の複雑な諸本の本文の比較検討が十分になされ、加えて和歌の解釈においても、「共同作業の最大の得」ともいふべき様々な「異見をなるべく残す」(工藤重矩氏「あとがき」)方針をとった結果、きわめて詳細な注釈書の観

を呈している。

また、解説として「源兼澄集の伝本と本文」(田坂憲二氏)「源兼澄の伝記と詠歌活動」(福井迪子氏)の二篇が載るが、これらは、「注釈書の解題というよりは、独立した論文と見るべきもの」(今井源衛氏「序」)である。

更に巻末には自立語・歌題・人名・初句索引を付載し、利用の便を図る。

(平成三年一月 風間書房 A5判 三〇四頁 八二四〇円)

板坂耀子校訂

叢書江戸時代文庫17

『近世紀行集成』

『国書総目録』だけでも数千を越えるという近世紀行は、その大半が注目されることなく埋もれてきた。また、橋南溪や菅江真澄等による一部のみは翻字され、紹介されてはいたが、それは個々の紀行への関心だけで成り立っていたものであり、近世紀行全体を体系的に眺め位置づけようという試みはなかったといつてよいであろう。本書の校訂者である板坂耀子氏は、膨大な数にのぼる近世紀行を丹念に掘り起こしてこられた。その板坂氏によって編まれた本書は、単なる有名紀行の羅列ではなく、氏の言葉に依れば「政治や社会と積極的にかかわり、科学性や合理性に基づいて行動する人々の、時代の証言としての作品類に、近世紀行文の一つの典型を見、そのような流れを中心として、本書を構成したかったからである。」

と言われるように、近世紀行に対する一つの視点を提示するかたちをとって成っている。

採録されているのは、「壬申紀行」(具原益軒)・『本朝奇跡談』(植村政勝)・『未曾有記』『続未曾有記』(遠山景晋)・『筑紫道草』(林英存)・『花見の日記』(津村正恭)の六作品である。これらの紀行文は、ここにはじめて翻字され紹介されるものであると同時に、地域、時代、内容ともにそれぞれ多岐にわたるものであり、「近世紀行文学史そのものを表現するようになるかたちで配列」されている。しかし、多岐にわたる内容の採録作品ではあるが、板坂氏はそこに共通する「国家意識」や「合理主義」、更にはその根底にある「さまざまな平凡な小世界の日常への愛着と信頼」という視点をとることによって、本書に近世紀行文学史としての筋を通そうとされている。

本書の出現により、研究者は勿論のこと、広く一般の読者にも手軽に近世紀行文を概観できるようになったことは歓迎されよう。

(平成三年一月 国書刊行会 B6判 四五九頁 四八〇〇円)